おさなごを発見せよ

羽仁もと子

青空文庫

おさなごは、子宝のなかのさらに貴い宝です。この生きた宝物を新しい心でながめていると、あらゆる喜びとあらゆる望みが、つぎつぎとそのなかに発見されて、じっとしてはいられない気になります。

まず第一に、いま生まれたみどりごが、お産婆の手よりも何よりも、自分で生きる力をあたえられているのだということを、たしかに自覚している母親は幾人あるでしょう。都会の新式の家にすむ知識階級の母親から、農村の茅屋にすんでいる母親まで、赤ん坊や幼児の強い自力に気がついていないことにおいては、全然同一ではないかと思われます。その結果知識階級の母親は、そのもっている知識のために、しぜん子供を神経的に取り扱うようになり、無知な母親はただその感情のおもむくままに、かわいがったり叱ったりするだけのことになります。

おさなごを新たに発見するとはどういうことであるか。いいかえれば、おさなごはみずから生きる力をあたえられているもので、しかもその力は親々の助けやあらゆる周囲の力にまさる強力なものだということを、たしかに知ることです。のみならず、そうしてその強い力が、われわれに何を要求しているかを知ることです。人は赤ん坊のときから、その生きる力はそれ自身のなかにあります。母親が自分のもっている知識や感情を先にたてて、知らずしらず赤ん坊のみずから生きる力を無視していると、赤ん坊というものは容易にその方によりかかって、そうして自分のなかに強く存在しているところのみずから生きる力を弱めてゆくものです。

赤ん坊のみずから生きる力が弱くなると、そこにどういうことが現われてくるか。自分の生命のほんとうの要求が自分にわからなくなってくるのです。そうしてただ眼前の苦痛や満足や喜びや悲しみのみにとらわれて、それぱかりを訴えたり表現したりするようになります。したがって母親をはじめ周囲のものが、その赤ん坊の真の生命の要求ではないところの、その場その場の浅はかな訴えに動かされて、さまざまの処置をするようになる。その結果は赤ん坊の真の生命ははぐくまれずに、当座の感覚的要求ばかりが日に日に強くされてゆきます。こうして丈夫に生まれても弱くなる赤ん坊や、良知良能がさずかっているのに、まったくききわけのないわがままな子供や、頭脳の悪い子供ができてゆきます。

赤ん坊自身に自分の生命のほんとうの要求がわからなくなる、赤ん坊自身のみずから生きる力が弱くなるとはどういうことか。実例をもっていえば、寝かすと泣く赤ん坊がたくさんあって、夜も昼も抱かれていることを望んでいる。そうしてそれは赤ん坊の生命の真の要求ではありません。すべてのことに感じやすい馴れやすい赤ん坊は、外からつけられた習慣に我知らずつり込まれてしまって、寝ていることは自分の心身のほんとうの要求である、そこで自由に手や足を動かしてだんだんに愉快な成長を遂げてゆく力を、その本能にしっかりとあたえられていることがわからなくなってしまって、ただ抱かれたい感覚に支配されてしまっているのです。

他人がつきってなんでもしていてくれるために、心身ともに運動不足になっている上流生活の幼児と、一銭おくれ二銭おくれで朝から夕方まで買い食いをしている幼児とは、ともに食

事どきの食欲がない。それも自分の生命のほんとうの要求がわからなくなって、ただ一銭二銭のおもちゃまがいの非衛生的な食物を買ってなめつづけることを喜ぶようになったり、他人が自分の用事をしてくれるために、できるだけ自分で自分の用事を運ぶことが、自分の生命の真の要求であることがわからなくなって、かえってそれをすることを苦痛と思うようになっているのです。

それではなにが赤ん坊の生命の真の要求であるか。それは人類の長いあいだの経験が科学的に整理されて、だんだんにわかってきました。くわしくいえば、そのはじめにはおそらく赤ん坊を産んだ母の乳汁が出る、赤ん坊の方は強い飢えを感じて、偶然的に必然的に母の乳房に吸いついたのでしょう。けれども母親の胸に乳房をあたえ、赤ん坊に食欲を用意しておきになった方は、はじめからそのすべてをご存知です。人間は長いあいだの経験を通して、すべての赤ん坊の生命の育ってゆく筋道をだんだんに発見させられてきました。

そうしてそれをいまわれわれのもっている育児の知識といい得ます。

しかしそれではいまのわれわれのもつ育児の知識にぴったりと当てはまることをもって、ただちに赤ん坊の生命の真の要求とみるのであるか、決してそうではありません。そうしてそこにまた一つの大きな問題をおかなくてはなりません。

われわれの現在もっている（現在のみならず将来にしても）育児の知識をさきにたてて赤ん坊を取り扱うということは、また一つのまちがいのもとです。すなわちはじめにいった通り、

子供を育てるにはまず何よりも子供自身の生きる力を尊重しなくてはならないからです。子供自身からその力その生命の真の要求が強くあらわれるようでなければ、親々の詰め込み養育詰め込み教育になってしまって、その程度その種類こそちがえ、子供をいろいろの邪道に連れこんでゆくことになります。詰め込み養育や教育がもっともよくできた場合にも、盆栽や箱庭式の健康と人物をつくりあげるだけのことになってしまいます。

私どもはいつでも子供の生命（いのち）そのものに直面して、それが自分たちに要求するままに、すべてのことをしてやりたいのです。われわれの育児の知識は実に大切なその方向と手段を私たちに示してくれるものです。

生まれたての赤ん坊に、母乳は最良の食物であることはわれわれの育児知識です。まず第一に赤ん坊がお腹（なか）のすいた様子をみせたときにあたえましょう。産まれて何時間目ぐらいという一般の標準もまたわれわれの育児の知識です。しかしまず赤ん坊の様子に注意しつつ、その持ち合わせの知識を応用するのです。そうしてその吸い方が力強ければ、また乳をもらった後でこころよく眠るならば、それはその最初の授乳が赤ん坊の生命の真の要求に応（こた）え得たものであるとわかってくるはずです。

時間正しく乳をあたえることは、育児の知識のわれわれに教えているところです。時間にならないうちに赤ん坊が泣き出して困るときに、二つの方法があります。泣くから乳をやるという方法と、泣いても時間まではやらないという方法とです。そのどちらが赤ん坊の生命の真の

要求に忠実なのでしょう。そういうときは、やるときめる、やらないときめる、その双方ともにいけないと思います。きめかねてうろうろするのはなおいけないことです。

そこに重大なわれわれの育児の知識以上の、親と子の接触があります。そうしてそれはおそらくただに個々の親子ばかりでなく、もっと広い意味での人間と人間の人格的ふれあいをつくってゆくところの基礎になる重要なことなのだと思われます。

赤ん坊のあたえられている力強い生命そのものに第一の関心をふかく持ち、その思いをもって日夜赤ん坊に接している母親であれば、その泣き声にも笑い声にも、いろいろのものがあることがわかります。まず落ちついてそれを聞きわける余裕が、母親の人格に必要です。母親ばかりでなくその周囲の人びとにも必要です。赤ん坊の感覚は非常に敏感なものです。それ泣いたそれ笑ったと家中が一喜一憂のうちにさわぎをすれば、赤ん坊もそれにつりこまれて、はじめ泣きだしたほんとうの必要がなんであっても、おとなのただならないさわぎのために驚きあわてていつまでも泣くことにもなるものです。

おとなはたまりかねて抱きあげてやる。赤ん坊はその方に気をとられて黙ってしまう。つぎつぎにこういう種類の接触を赤ん坊とすることは、赤ん坊が泣いても母親が内職の手をやめることができない、草をとっている田からあがってくることができない種類の育児とともに、もっとも有害な育児法です。

赤ん坊にも幼児にも、まずなによりも大切だと思われるわれわれの接触の仕方は、赤ん坊自

身にあたえられているその生きる力の強さを信じて、落ちついた賢さをもってその要求その状態をはっきりと知り得ることです。

赤ん坊は何かちょっとした衝動をうけても、泣く運動をはじめます。おしめその他に落度がなければ、はたが落ちついていれば、やがて泣きやむ多くの場合があるはずです。それほど簡単に泣きやまないので、なんのためかよくわからない場合も多くありましょう。あるいは乳がほしいという要求のためかもしれないのですが、それを乳の時間まで待たしても決してそのために病気にも何にもなるわけはないのですから、たいした故障のあるような泣き方でないことさえわかっていたら、そうした不明のむずかりは、そのままにしておくべきだと思います。乳の時間になって乳をやってみると、その様子でやはり空腹のためであったかどうかがまたよほど察しられるでしょう。そのつぎもまたそのつぎも同じようであれば、いよいよ全体的に乳不足のせいであることがわかります。そのときにまたわれわれのもっている育児の知識と照らしあわせて、いろいろの判断と処置とを講ずべきです。

そうしてこれは、もちろん泣くから乳をやるという育児法とは全然反対ですが、同時にただ簡単に赤ん坊が泣いても時間までは決して乳をやらないときめてしまうというのとも同じでないことはよくおわかりになるでしょう。第一に生きた自分の子供の日々の生活状態をよく知って、その日その日のことばかりでなく、いまの育児の知識がわれわれに示していてくれる一般嬰児（えいじ）の発育の状態を有力な参考にして、赤ん坊を取り扱ってゆくべきです。そうしてそのあい

だに疑問を見いだすときに、それは専門の医師との相談ともなり、幼児生活団の研究題目にもなるわけです。

以上は赤ん坊の身体を主としてみた、いわゆる育児法の急所であるばかりでなく、その精神生活においてもまったく同じことであります。

その両親や周囲の人びとが、赤ん坊自身にさずかっているみずから生きる力に対して、敬虔(けいけん)な信頼の思いをもっていることから、しぜんに落ちついた気持ちになって、深い愛情と強い理性と現在最高の知識をもって赤ん坊に接するならば、かれらはたやすくその柔らかい生命にそのよい力をうけるものです。子供の教育の一番尊(とうと)い立場はただそこにあると思います。

この神秘ともいい得るところの、動(ゆる)ぎなき教育の立場をもつことなしに、どんな方法を講じても、それは詰め込みにばかりなってしまいます。学校教育ばかりでなく、幼児教育にもどんなに多くこの詰め込み教育が行われているでしょう。

どうすれば子供たちが真面目(まじめ)に育つか、その真面目な人格を基礎として、さらにそのなかに自由自在に目のきく働きのある頭脳(あたま)ができてゆくか、縦にも横にも強くはたらく実行力が生まれてくるか。

それはただ、子供自身がその生命のなかに、自分の生命をまもり育てるために、なくてならない強い賢い力をさずかっているものであることを確信して、赤ん坊の泣き方にも幼児のまわらぬ口にそのおさない思いを語るときにも、それらによって、ほんとうに彼を知ることが第一

です。あらゆる教育の工夫はみなそこから出てきます。われわれの幼児の教育も養育も、この趣意によって一貫されていることを忘れないようにしましょう。

教育三十年　一九三八年（昭和一三）

青空文庫情報

底本：「羽仁もと子選集　おさなごを発見せよ」婦人之友社
1965（昭和40）年11月1日初版発行
1995（平成7）年10月1日新刷発行
1999（平成11）年11月1日5刷
初出：「教育三十年」
1938（昭和13）年
※底本にある語句の編集注は削除しました。
入力：蒋龍
校正：門田裕志
2012年5月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おさなごを発見せよ

羽仁もと子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/